

我と微塵の書

サイード・ヌルスィー

リサーレ・イ・ヌール全集より
我と微塵の書

書名：我と微塵の書

著者：ベディーウツザマン・サイード・ヌルスィー
トルコ語からの翻訳：ヤヒヤ・セキ

発行所：レイハン出版

発行日：2026年10月

印刷所：IMAK（イマク）〔イスタンブル〕



著作権 © レイハン出版 2026

I S B N : 978-83-63796-48-8

リサーレ・イ・ヌール全集より

我と微塵の書

サイード・ヌルスィー



2026年10月

宇宙の秘鍵を見出し、クルアーンの重要な
一つの秘義を解き明かしたる者

第三十の言葉

「我」と「微塵」より成るものは、一つの「
アリフ」と一つの「点」である。

この言葉は二つの目的から成る。第一の目的
は「我」の本質とその帰結について述べ、第
二の目的は「微塵」の運動とその任務につい
て語る。

第一の目的

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
أَنَا عَرْضْنَا الْأَمَانَةَ عَلَى السَّمَوَاتِ وَالْأَرْضِ وَالْجِبَالِ
فَإَيُّنَ أَنْ يَحْمِلْنَهَا وَأَشْفَقْنَ مِنْهَا وَحَمَلَهَا الْإِنْسَانُ إِنَّهُ
كَانَ ظَلُومًا جَهُولًا

この節のもつ大いなる宝庫のうちより、ただ一つの宝石に指し示すことにする。すなわち、天と地と山々が担うことを畏れ、耐え得ずして拒んだその信託の、多様な側面のうちの一つ、その一相が「我」である。

まことに「我」とは、アーダムの時代より今に至るまで、人類の世界の周囲に枝葉を広げ続けてきた光輝あるトゥーバーの樹と、恐るべきザックームの樹、その両者の種子なのである。

この偉大なる真理に踏み入る前に、その理解を容易ならしめるための一つの序論を述べよう。すなわち次のごとくである。

「我」とは、秘蔵された神名の宝庫の鍵であると同時に、宇宙の閉ざされた秘義の鍵でもあり、解き難き謎を解き開く難問解消の謎であり、驚嘆を呼ぶ秘鍵である。この「我」の本質が知られることによって、この奇異なる謎、この驚異なる秘鍵たる「我」は開かれ、宇宙の秘義と、必然存在の世界の宝庫とが、同時に開示されるのである。

この問題について、我が『シャツマ』と題するアラビア語の小論において、次のように述べたことがある。

森羅万象の鍵は人間の手にあり、しかもそれは自己の内に結び付けられている。宇宙の諸門は、外見上は開かれているように見えるが、真実には閉ざされている。至高なるアッラーは、信託という側面から、人間に「我」と名づけられた、かくも一つの鍵を与え給うた。それは宇宙のすべての門を開くものであり、また、かくも秘義に満ちた自己性を授け給うて、それによって造化主たる宇宙の主の秘蔵の宝を発見せしめるのである。

しかしながら「我」それ自体もまた、きわめて曖昧なる謎であり、その開示の困難なる秘鍵なのである。

もしその真実の本質と創造の秘義が知られるならば、それ自体が開かれるのみならず、宇宙もまた開示される。すなわち次のごとくである。

叡智なる造化主は、人間の手に信託として、その統治の諸属性と諸相の真実を示し、認識させるための徴と標本を総合的に含む「我」を与え給うた。かくしてその「我」が一つの比較単位となり、統治の属性と神性の諸相が知られるのである。

しかし、この比較単位は、真実に存在する実体である必要はない。むしろ幾何学における仮想線のごとく、仮定と想像によって比較単位は構成されうる。知と確証において、実在的存在である必要はないのである。

問

なぜ至高なるアッラーの属性と御名の認識は、自我（我）に結び付けられているのか。

答

それは、絶対的かつ遍在するものには境界や終点が存在しないがゆえに、形を与えることも、像や限定を施すこともできず、その本質が何であるか理解されないからである。

たとえば、闇なき永遠の光は、知られることも感知されることもない。真実の闇であれ、想像上の闇であれ、ひとたびそこに境界が引かれるならば、はじめてそれは知られる。

まさにこれと同じく、至高なるアッラーの知と力、英知と慈悲といった属性と御名は、遍在し、無限であり、比類なきものであるがゆえに、それらに対して判断が下されず、その正体は知られず、感知されない。

ゆえに、それらには真実の終点や境界が存在しない以上、仮想的かつ想像的な境界を描く必要が生じる。その役割を果たすのが自我、すなわち「我」である。

人は自らの内に、仮想された統治性、所有性、力、知を想定し、そこに一つの境界を引く。それによって遍在する属性に対して仮の限界を設定し、「ここまでは私のものであり、それ以後は彼のものである」と分節する。

そして自らの内なる微小な尺度によって、それらの本質を徐々に理解するのである。

たとえば、人は自らの支配圏における仮想的統治性によって、可能存在の領域における創造主の統治を理解する。また外見的な所有によって、創造主の真実の所有を悟り、「こ

の家を私が所有するように、創造主はこの宇宙全体の所有者である」と言うのである。

また、自らの部分的な知によってその無限の知を理解し、獲得的な小さな技によって、莊嚴なる造化主の無からの創造を悟る。

たとえば、「私はこの家をこのように建て、整えた。同じように、この世界という家もまた、誰かによって建てられ、整えられたのである」と言うのである。

このようにして、神的属性と諸相をある程度まで知らせ、示すための、無数の秘められた状態、性質、感覚が「我」の中に含蔵されている。

ゆえに「我」とは、鏡のような存在であり、比較単位であり、展開のための道具であり、文字的意味のごとく、自身には意味を持たず、他者の意味を示すものである。それは人間存在という太き綱から引き出された、意識をもつ一本の細き糸であり、人間的本性という衣から抜き出された繊細な糸であり、人間人格という書物の中の一本のアリフである。そしてそのアリフには「二つの面」がある。

一つの面は善と存在へと向かう。この面において、「我」はただ恩寵を受け取る資格をもつのみである。与える者を受容し、自ら創

造することはできない。この面において、それは行為主体ではなく、創造からは手が短い。

もう一つの面は悪へと向かい、無へと沈む。この面において、それは行為主体となり、行為の担い手となる。またその本質は文字的であり、他者の意味を指し示す。そこにある統治性は想像上のものである。

その存在はあまりにも弱く、あまりにも繊細であるがゆえに、それ自体としては何ものにも耐えられず、何ものをも背負うことができない。むしろそれは、熱量計や気圧計のように、事物の段階や量を示す一種の秤であり、必然存在者の絶対的・遍在的・無限なる属性を示すための秤なのである。

かくのごとき仕方で自らの本質を知り、これを確信し、その理解に基づいて行動する者は、

قَدْ أَفْلَحَ مَنْ زَكَّيْهَا

という吉報の中に入る。

彼は信託を正しく果たし、その「我」という望遠鏡によって、宇宙が何であるか、いかなる任務を担っているかを見極める。外界的な知識が魂に到来するとき、「我」の内にそ

れを承認する証人を見出すのである。その諸学は光と叡智として留まり、闇や無意味へと転落することはない。

そして「我」がこのようにしてその任務を果たすとき、比較単位にすぎなかった仮想的統治性と、仮定的所有性を放棄し、

لَهُ الْمُلْكُ وَ لَهُ الْحَمْدُ وَ لَهُ الْحُكْمُ وَ إِلَيْهِ تُرْجَعُونَ

と告白する。

かくして真実の奉仕の位相を身にまとい、「最も美しく整えられた形」の位階へと昇るのである。

もしこの「我」が、創造の叡智を忘れ、生得の任務を捨て、名詞的意味において自分自身を見つめ、自らを所有者であると信じるならば、そのとき信託に背くことになり、

وَ قَدْ خَابَ مَنْ دَسَّيْهَا

の下に入る。

かくして、あらゆる多神崇拜、あらゆる悪、あらゆる迷妄を生み出す我執は、この側面から生じるのである。ゆえに天と地と山々は驚愕し、仮想的な多神性を恐れたのであった

。

まことに「我」は、一本の細きアリフ、一条の糸、仮定された一本の線にすぎない。しかしその本質が知られぬならば、覆い隠す土の下で芽吹き、次第に太くなり、人間存在の全体に広がってゆく。やがて巨大な竜のごとく、人間の存在を呑み込み、その繊細な諸機能すべてをもって、まるで全体が「我」と化する。

さらに種的我執は、種族的・民族的な集団意識によってこの我執に力を与え、「我」はその集団的我執に依拠して、シャイターンのごとく、威光ある造化主の命令に抗争する。

そして自己を基準とする比較によって、すべての者、さらには万物までも自分に比し、至高なるアッラーの支配をそれらや原因に分配する。ここに至って、きわめて重大な多神崇拝へと墮するのである。

إِنَّ الشِّرْكَ لَظُلْمٌ عَظِيمٌ

の意味が、ここに明らかとなる。

たとえば、公有財産から四十銭を盗んだ者が、その罪を薄めるために、居合わせた仲間すべてに一銭ずつ配ることに同意するがごとく、「私は自分の所有者である」と言う者は、「すべてのものはそれぞれ自分自身の所有

者である」と言い、そう信じるほかなくなるのである。

このような背信の状態にある「我」は、完全な無知の中にある。たとえ幾千の学問を知っていたとしても、それは複合無知における最も愚かな者にすぎない。

なぜなら、その感覚や思考が、宇宙の認識の光をもたらしても、自らの内にそれを承認し、照らし、持続させる基盤を見出せないがゆえに、それらは消え去ってしまうからである。到来するすべてのものは、自己の内なる色によって染め上げられる。純粋な叡智が来ても、自己の内では完全な無意味の姿をとる。

この状態にある「我」の色は、多神性と否定であり、アッラーの否認だからである。宇宙がいかに輝かしい徴に満ちていようとも、その「我」にある暗き一点が、視界においてそれらを消し去り、見えなくしてしまう。

第十一の言葉において、人間本性と、その本性に内在する我執が、文字的意味の側面において、いかに繊細な秤であり、正確な尺度であり、遍在的な索引であり、完全な地図であり、包括的な鏡であり、宇宙にとって美し

き暦、日誌であるかが、きわめて確定的に詳述されている。そこに参照されたい。

その言葉での詳細に委ね、本序論は簡潔にここで終える。

もしこの序論を理解したならば、さあ、真理そのものへと踏み入ろう。

見よ。人類の世界において、アーダムの時代より今に至るまで、二つの巨大な潮流、二つの思惟の系譜が存在してきた。それらはあらゆる場所、あらゆる人間の階層に枝葉を伸ばし、二本の巨大な樹木のごとき姿をなしている。

一つは、預言と信仰の系譜であり、もう一つは、哲学と知恵の系譜である。

この二つの系譜が混じり合い、結合したとき、すなわち哲学の系譜が信仰の系譜の中に入り、これに従って奉仕したとき、人類世界は明るく輝く幸福と、健全なる社会的生を営んできた。

しかし、この二つが分離して進んだとき、あらゆる善と光は、預言と信仰の系譜の周囲に集まり、悪と迷妄は、哲学の系譜の周囲に凝集した。

ゆえに今、我々はこの二つの系譜の起源と根本原理を見極めねばならない。

信仰の系譜に服さぬ哲学の系譜は、ザックームの樹のごとき姿をとり、多神性と迷妄の闇を周囲に撒き散らす。理知の力の枝においては、永劫論者、唯物論者、自然主義者といった果実を、人間の理性の手に与えてきた。

また、攻撃的衝動の枝においては、ニムロド、ファラオ、シャッターードといった者たちを、人類の上に投げつけてきた。

(注)

まことに、ニムロドやファラオを育て、乳を与えたのは、古代エジプトやバビロンの、魔術の域にまで高められた、あるいは秘奥ゆえに魔術と見なされた古代哲学であった。同様に、神々を古代ギリシアの精神に据え、偶像を生み出したのも、自然哲学という沼地である。自然という覆いによってアッラーの光を見失った人間は、万物に神性を付与し、それらを自分自身の上に君臨させてしまうのである。

さらに、獸的欲望の力の枝においては、神々、偶像、そして神性を僭称する者たちを実らせ、育ててきた。

これに対して、預言の系譜は、純粹なる奉仕のトゥーバーの樹にたとえられる。その祝福された枝は、この地球という園において、理知の力の枝には預言者たち、使徒たち、聖者たち、眞実者たちを實らせ、自己防衛の力の枝には正義なる裁判官たち、天使のごとき王たちを生み、引き寄せる力の枝には、品格の美しさ、純潔なる容姿、寛大さと高潔さで名高い者たちを實らせてきた。

この樹はまた、人間がこの宇宙の中で最も完成された果実であることを示している。

そして、この二本の樹の起源は、「我」の二つの側面にあるのである。

この二つの樹の根源であり、基盤である根本的な種子として、「我」の二つの面を明らかにしよう。

すなわち、「我」の一つの面を預言が担って進み、もう一つの面を哲学が担って進んできたのである。

預言に属する第一の面とは、純粹なる奉仕の起源である。

すなわち「我」は、自らを僕であると知り、他者に仕える存在であることを理解する。

その本質は文字的であり、すなわち他者の意味を担い、それを理解する。

その存在は従属的であり、他者の存在によって支えられ、その創造によって確立されていると信じる。

その所有性は想像的であり、真の所有者の許しのもとでのみ、形の上で、一時的に所有しているにすぎないと知る。

その実相は影的であり、真実にして必然なる實在の反映を宿す、可能的で貧しき影にすぎない。

その任務とは、自らの創造主の属性と諸相に対する尺度と秤として、意識的に奉仕することである。

これこそが、預言者たち、そしてその系譜に連なる選ばれし者たち、聖者たちが、「我」をこの面から見つめ、かく理解し、その真理を把握してきた道である。

彼らは、すべての支配を万有の主に委ね、次のごとく断じた。

すなわち、その威光ある主の支配にも、統治にも、神性にも、いかなる同伴者も比肩者も存在しない。補佐者や宰相を必要とせず、万物の鍵はその御手にあり、あらゆるものに

対して絶対的な力を有する。原因とは、ただ外面的な覆いにすぎず、自然とは、生得的な法であり、その諸法則の集合体であり、またその力の物差しにすぎない、というのである。

かくして、この明るく、光に満ち、美しい面は、生命を運び、意味に満ちた一つの種子の位に至った。そこから威光ある創造主は、奉仕のトゥーバー樹を創り出し、その祝福された枝は、人類世界のあらゆる場所を、光輝ある果実によって飾り立ててきた。

それは、過去のすべての闇を払い除け、長き過去が、哲学の見るがごとき巨大な墓所や無の国ではなく、むしろ来世と永遠の幸福へと跳躍するために、消えゆく魂たちに光を与える場であり、段階をもつ輝かしい昇天の梯子であり、重荷を下ろして自由となり、この世を去ってゆく魂たちの、光に満ちた園であることを示したのである。

これに対し、第二の面は哲学が担ってきた。哲学は「我」を名詞的意味において捉えた。すなわち、「我」はそれ自体を指示し、その意味は自己の内にあり、自分自身のために働き、判断するとした。

その存在を本質的・自存的であると考え、自らの内に実在としての存在があると見なした。また、生命の権利を有し、その支配領域において真の所有者であると主張した。「我」を固定された実在的真理であると錯覚し、その任務を自己愛から生じる自己完成であると理解するなど、多くの腐敗した原理の上にその道を築いたのである。

これらの原理がいかに根拠なく脆弱であるかについては、他の諸書、とりわけ『言葉』の中の第十二の言葉および第二十五の言葉において、確定的に証明してきた。

さらに、哲学の系譜の中でも最も完成された人物、すなわちその天才と称されるプラトン、アリストテレス、イブン・スィーナー、ファーラービーらでさえも、「人間性の究極目的は『必然存在への類似』である」と述べ、必然存在に似ることを目指すべきだとする、きわめて僭越なる判断を下した。

彼らはこのようにして我執を煽り立て、多神性の谷間へと自由に走らせ、原因崇拜、偶像崇拜、自然崇拜、星辰崇拜といった、数多くの多神的潮流に道を開いた。人間性の本質に内在する無力、脆弱、貧困、欠乏、不完全といった門を閉ざし、奉仕の道を塞いだのであ

る。自然に囚われ、多神性から完全に抜け出すことができず、感謝という広大な門を見出すこともできなかった。

これに対し、預言は次のように断じた。

人間性の目的、人類の任務とは、神的徳と善き資質を身にまとうことであるが、それと同時に、自らの無力を知って神の力に避難し、脆弱さを見て神の力に依拠し、貧しさを見て神の慈悲に信頼し、欠乏を見て神の豊かさに救いを求め、過ちを見て神の赦しを求め、不完全を見て神の完全性を讃える者となることである、と。これこそが奉仕に満ちた判断である。

信仰に従わぬ哲学がこのように道を誤ったがゆえに、「我」は自らの手に手綱を握り、迷妄のあらゆる種類へと奔走したのである。この面における「我」の頭上には、ザックームの樹が芽吹き、人類世界の半分以上を覆い尽くした。

その樹の、獸的欲望の力の枝において、人間の視線に与えた果実とは、偶像と偽りの神々である。なぜなら哲学の根底には、力こそが称揚されるという考えがあるからである。

実に「支配は勝者のものなり」という格言は、その基本原理である。「勝つ者には力があり、力には正当性がある」と言うのである。

(注一)

預言の原理は「力は正義に奉仕する。正義が力に従うのではない」と言い、抑圧を断ち、正義を確立する。

哲学は、抑圧を精神的に称賛し、暴君を励まし、専制者を神性の僭称へと駆り立てた。また、被造物に見られる美や装飾の美を、その被造物や装飾そのものに帰し、造り主と装飾主の純粹で聖なる美の顕現に帰属させず、「よく造られている」と言う代わりに「それ自体が美しい」と言う。かくして、それを崇拜に値する偶像の位へと引き上げる。

さらに、誰にでも売り渡される虚飾的で自己顕示的、見せかけに満ちた美を称揚するがゆえに、偽善者を賞賛し、偶像のごとき者たちを、その崇拜者たちにとっての聖所とした。

(注二)

すなわち、それら偶像的存在は、崇拜者の欲望に媚び、注目を集めるため、偽善的な誇

示によって、あたかも礼拝であるかのような振る舞いを示すのである。

またその樹の、攻撃的衝動の力の枝においては、哀れな人類の頭上に、小さき大ききニムロド、ファラオ、シャッダードといった果実を实らせてきた。理知の力の枝においては、人類世界の精神に、永劫論者、唯物論者、自然主義者といった果実を与え、人間の知性を粉碎してきたのである。

さて、この真理を明らかにするため、哲学の道の腐敗した原理から生じた結果と、預言の系譜の真実なる原理から生まれた結果とを、数多ある比較の中から、例として三、四挙げることにしよう。

たとえば第一の例。

預言の、個人生活における原理的帰結として、

تَخَلَّقُوا بِأَخْلَاقِ اللَّهِ

すなわち

「神的徳を身にまとい、至高なるアッラーにへりくだって向かい、自らの無力、貧困、欠如を知り、その御前に僕として立て」というこの原理はどこにあり、

これに対して、哲学の

「必然存在に似ることこそ人間性の究極完成である」という規範、すなわち「必然存在に似るよう努めよ」という自己顕示的な原理はどこにあるのか。

無限の無力、脆弱、貧困、欠乏によって練り上げられた人間本性はいずこにあり、無限にして全能、強大、富裕、自足なる必然存在の本質はいずこにあるのか。

第二の例。

預言の、社会生活における原理的帰結として、太陽と月から始まり、植物が動物を助け、動物が人間を助け、さらには食物の微粒子が身体の細胞を助け支えるまで、万物が相互扶助へと駆り立てられているという「協働の原理」「寛容の法」「施与の倫理」はいずこにあるのか。

これに対して、哲学の社会原理として、ごく一部の暴虐で獣性に支配された人間や野獣が、自らの本性を誤用することから生じた「闘争の原理」はいずこにあるのか。

彼らはこの闘争の原理を、あまりにも根本的かつ普遍的なものとして受け入れ、「生命

とは闘争である」と愚かにも断じたのである。
。

第三の例。

預言の、神的一性に関する崇高なる帰結と支配的原理として、

الْوَّاحِدُ لَا يَصْدُرُ إِلَّا عَنِ الْوَّاحِدِ

すなわち「一性を有するものは、ただ一なるものからのみ発出する。万物の中に一性が見られる以上、それらはすべて一なる存在の創造である」という、徹底した一神信仰の原理はいずこにあるのか。

これに対し、古代哲学の信条的原理としての、

الْوَّاحِدُ لَا يَصْدُرُ عَنْهُ إِلَّا الْوَّاحِدُ

すなわち

「一からは一のみが発出する。一なる存在からは直接にはただ一つしか出ず、他のものは媒介を通じて生じる」と説き、絶対に富み、絶対に全能なる存在を、無力な媒介に依存させ、原因や手段のすべてに統治の一部を分け与え、威光ある創造主には「第一知性」と名づけた一被造物だけを割り当て、他の支配を原因や媒介に分配することで、巨大な多神

性への道を開いた、汚れた迷妄の哲学の原理はいずこにあるのか。

哲学者の中でも比較的高位とされる照明学派ですらこのような過ちを犯すならば、唯物論者や自然主義者といった下位の潮流が、どれほどの逸脱を犯すかは、推して知るべきであろう。

第四の例。

預言の、叡智に満ちた原理として、

وَإِنْ مِنْ شَيْءٍ إِلَّا يُسَبِّحُ بِحَمْدِهِ

という秘義に基づき、「すべての存在、生あるものの結果と叡智が自己に帰するものは一つであっても、創造主に帰する結果と造化主に向かう叡智は数千に及ぶ。あらゆる存在、たとえ一つの果実であっても、一つの木がもつ果実の数ほどの叡智と結果を有する」という、純然たる真理としての叡智の原理はいずこにあるのか。

これに対して哲学は、「生あるものの結果は自己に帰するか、あるいは人間の利益に属する」と考え、大山のような一本の木に、芥子粒ほどの一つの果実だけを結果として貼り付けるかのごとき、きわめて無意味な不条理

の中で、虚飾された叡智という名の無叡智な原理を立てている。

この真理は、『第十の言葉』の「第十の真理」において、ある程度示されているため、ここでは簡略にとどめた。この四つの例から、さらに数千の例を類推することができよう。

『閃光』と題する一書においても、その一部に触れている。

このように、哲学のかかる腐敗した原理と、その恐るべき帰結ゆえに、イスラームの哲学者の中でも、イブン・スィーナーやファラービーのごとき天才たちは、その外面的な輝きに心を奪われ、その道に欺かれて足を踏み入れた結果、せいぜい平凡な一信徒の位階を得るにとどまったのである。

しかも、イスラームの証人たるイマーム・ガザーリーは、彼らにその位階すら認めなかった。

また、神学者の中でも学殖深き碩学とされたムウタズィラ派の導師たちは、その外見的な装飾に魅了され、その道に真剣に関与し、理性を支配者として据えたがゆえに、結局は逸脱を伴う不信仰な信徒の段階にしか到達できなかった。

さらに、イスラーム文学者の中でも、厭世観で知られるアブル・アラー・マアッリーや、孤児の嘆きにたとえられる詩情をもつオマル・ハイヤームのごとき者たちは、その道が自我を喜ばせる快樂を含んでいたがために、これに耽溺し、真理と完成の人々から、軽蔑と断罪の一撃を受けた。

「無礼を働いている」「背信へと踏み込み、背信者を育てている」

との厳しい懲戒の鉄槌を受けたのである。

また、哲学の道の腐敗した原理の一つとして、次のことが挙げられる。

すなわち「我」は、その本質において空気のように脆弱な存在であるにもかかわらず、哲学の不吉な視線によって名詞的意味から眺められるため、あたかも蒸気のように拡散し、やがて慣れと物質への没入によって凝固していくかのように錯覚される。

その後、無関心と否認によってその我執は固着し、反抗によって濁り、透明性を失う。やがて次第に肥大化し、ついにはその持ち主を呑み込む。さらに人類全体の思考によって膨れ上がり、他の人々、さらには原因までもを自分自身と我欲に照らして比較し、彼らが拒否し、そこから離反しているにもかかわらず

ず、それぞれに一つずつファラオ的専横を押し付ける。

このとき、「我」は、威光ある創造主の命令に対して抗争する態勢を取るのである。

مَنْ يُحْيِي الْعِظَامَ وَ هِيَ رَمِيمٌ

と唱え、挑戦するかのごとく、絶対的全能者を無力であるかのように非難する。

さらには、威光ある創造主の属性にまで干渉し、自らの都合に合わぬもの、また欲望を支配する我執のファラオ性に気に入らぬものを、あるものは否定し、あるものは拒絶し、あるものは歪曲する。

その一例として、哲学者の一派は、至高なるアッラーを「本質的必然者」と呼び、その自由意志を否定した。そして、その自由意志を証明する、宇宙全体の無限の証言を虚偽として退けたのである。

ああ、なんということであろうか。

この宇宙において、微塵から太陽に至るまで、すべての存在は、その限定性、秩序、叡智、均衡によって、造化主の自由意志を示しているにもかかわらず、この盲目なる哲学の眼には、それが見えないのである。

また、ある哲学者たちは、「神の知は個別的事象には及ばない」と言い、神的知の偉大なる包摂を否定し、すべての存在が示す真実なる証言を拒絶した。

さらに哲学は、原因に作用を与え、自然の手に創造を委ねる。

第二十二の言葉において確証されたように、万物において万有の創造主に特有の輝かしい印章を見ず、無力で、不活性で、無意識で、盲目であり、偶然と力という二人の盲人の手に委ねられている自然に、創造の根源性を与え、無数の高次の叡智を表し、それぞれが至高者からの書簡に等しい存在の一部を、自然に帰属させてしまうのである。

また、第十の言葉で証明されたように、至高なるアッラーがすべての御名によって、宇宙がすべての真理によって、預言の系譜がすべての検証によって、また天啓の書がすべての節によって示している復活と来世への門を見出すことができず、復活を否定し、魂に永遠性を帰してしまった。

これらの荒唐無稽な誤謬に、他の諸問題を類推することができよう。

まことに、悪魔たちは、「我」という嘴と爪を用いて、無信仰な哲学者たちの理性を空

へと持ち上げ、迷妄の谷へと投げ落とし、散乱させたのである。

小宇宙においては「我」が、大宇宙においては自然が、暴君的偶像である。

فَمَنْ يَكْفُرْ بِالطَّاغُوتِ وَيُؤْمِنْ بِاللَّهِ فَقَدْ اسْتَمْسَكَ
بِالْعُرْوَةِ الْوُثْقَى لَا انْفِصَامَ لَهَا وَاللَّهُ سَمِيعٌ عَلِيمٌ

さて、前述の真理を照らし出すために、『閃光』において半ば韻文の形で記した、想像的な旅としての一つの比喩的出来事の趣旨を、ここに挙げるのが適切であろう。

それは、この書の執筆より八年前、イスタンブールにおいて、祝福されたラマダーン月の折、哲学の道と関わりをもっていた「旧サイド」が「新サイド」へと転ずる過渡期のことである。

そのとき、『開端章』の結びにある、
صِرَاطَ الَّذِينَ أَنْعَمْتَ عَلَيْهِمْ غَيْرِ الْمَغْضُوبِ عَلَيْهِمْ وَ
لَا الضَّالِّينَ

が指し示す三つの道について思索している最中、次のような想像的出来事、夢に似た象徴的体験を目にした。

自分が、広大なる荒野に立っているのを見た。

大地の全面は、暗く、息苦しく、圧迫する雲の層に覆われている。

そよ風もなく、光もなく、生命の水もない。

周囲はすべて、獰猛で有害な、恐ろしい生き物で満ちているように感じられたのである。

すると、心にこう浮かんた。

「この大地の向こう側には、光も、そよ風も、生命の水もある。そこへ渡らねばならぬ。」

見ると、私は自分の意思とは無関係に、ある力に導かれていた。大地の内部へと入り、トンネルのような洞穴に押し込まれたのである。次第に地中を旅していった。

見ると、私より先に、その地下の道を通った多くの者がいる。至るところで溺れ、行き詰まっていた。彼らの足跡が見えていた。時折、その声を耳にすることもあったが、やがて声は途絶えた。

想像の翼によって、この私の想像的旅に同行している友よ。

この大地とは「自然」であり、「自然哲学」である。

このトンネルとは、哲学者たちが、その思考によって真理へ至ろうとして掘り進めた道である。

私が見た足跡とは、プラトンやアリストテレスのような名高き者たちのものであり、

私が耳にした声とは、イブン・スィーナーやファラービーのような天才たちの声であった。

(注)

もし汝が言うならば、

「お前は何者だ。そのような偉人たちを前にして名乗り出るとは。お前は蚊のような存在で、鷲の飛翔に口出しするのか」と。

それに対して私はこう答える。

「クルアーンという永遠の師をもつ私には、迷妄に染まった哲学や、臆測に満ちた理性の弟子にすぎぬその鷲たちを、真理と認識の道において、蚊の羽ほどの価値としても評価する義務はない。仮に私が彼らよりどれほど劣っていようと、彼らの師は、私の師より千倍も劣る。私の師の庇護によって、彼らを溺れさせた物質は、私の足を濡らすことすら

できなかった。偉大な王の法と命令を携えた一兵卒は、小国の大元帥よりも、はるかに大きな働きを成し得るのである。」

私は、イブン・スィーナーの言葉や理論のいくつかを、ところどころで見かけた。しかし、その先は完全に途絶えていた。これ以上進めなかったのである。つまり、彼は溺れたのだ。

ともあれ、汝の好奇心を鎮めるために、想像の背後にある真実の一端を示した。今、私は再び旅に戻る。

進んでいくうちに、私の手に二つのものが与えられた。一つは電光であり、地下にある自然の闇を打ち払うものであった。もう一つは一つの道具であり、それによって巨大な岩や山のような石が砕かれ、道が開かれた。耳元でこう告げられた。

「この電光と道具は、クルアーンの宝庫から汝に授けられたものである。」

私はそのまま長い時を進んだ。やがて、向こう側へ出た。

そこには、雲一つない太陽、心を爽やかにする風、生命に満ちた甘美な水があり、万物

が歓喜に満ちた世界が広がっていた。私は「アルハムドゥリッラー」と唱えた。

すると気づいた。私は自分自身の所有者ではなかった。誰かが私を試していたのである。

再び、あの息苦しい雲の下の恐ろしい荒野に、自分が戻されているのを見た。今度は別の道へと導かれていた。

今度は地中ではなく、地表を旅して、地の反対側へ渡ろうとしていた。その旅の中で、言葉に尽くしがたい奇妙な光景を見た。海は怒り、嵐は私を脅し、万物が困難を突きつけてきた。しかし、クルアーンから授けられた旅の手段によって、それらを越え、打ち勝って進んだ。

進むにつれ、至るところで旅人たちの亡骸を目にした。この旅を最後まで成し遂げた者は、千人に一人にすぎなかった。

やがて雲を抜け、大地の向こう側へと渡り、美しい太陽と対面した。爽やかな風を胸いっぱい吸い込み、再び「アルハムドゥリッラー」と唱えた。そして、その樂園のような世界を眺め始めた。

しかし、また一人の存在が、私をそこに留めなかった。別の道を示すかのように、瞬時に私は再び、あの恐ろしい荒野へと連れ戻された。

見ると、上から降りてくる、エレベーターのようなものがあつた。あるものは飛行機のようにであり、あるものは自動車のようにであり、またあるものは籠のようであつた。それらは能力と資質に応じて、人が乗れば上へ引き上げていった。私はその一つに飛び乗った。

すると、わずか一分のうちに、雲の上へと引き上げられた。そこには、美しく飾られた緑の山々があつた。雲の層は山の中腹にすら届いていなかった。最も繊細な風、最も甘美な水、最も優しい光が、至るところに満ちていた。

そのとき気づいた。これらエレベーターのような光の住処は、至るところにあつたのだ。私は以前の二つの旅や、大地の向こう側でも、それらを見ていたが、理解していなかった。今、はっきりと分かった。これらはすべて、クルアーンの諸節の顕現なのである。

すなわち、

وَلَا الضَّالِّينَ

によって示される最初の道とは、自然に執着し、自然主義の思想を抱く者たちの道であり、そこでは真理と光へ至るために、いかに多くの困難があるかを、汝は感じ取ったであろう。

غَيْرِ الْمَغْضُوبِ

によって示される第二の道とは、原因を崇拜し、媒介に創造と作用を与える者たち、すなわち逍遙学派の哲学者たちのように、理性と思考のみによって、究極の真理と必然存在の認識へ至ろうとする道である。

そして、

الَّذِينَ أَنْعَمَ عَلَيْهِمُ

によって示される第三の道こそ、正道を歩む者たち、すなわちクルアーンの人々の光に満ちた大道である。それは最も短く、最も安らかで、最も安全で、万人に開かれた、天上の・慈悲的・光輝ある道なのである。

第二の目的

[微粒子の変転について]

この節の宝庫から、一つの微粒子を指し示すものである。

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ
وَقَالَ الَّذِينَ كَفَرُوا لَا تَأْتِينَا السَّاعَةُ قُلْ بَلَىٰ وَرَبِّي
لَتَأْتِيََنَّكُمْ عَالَمُ الْغَيْبِ لَا يَعْزُبُ عَنْهُ مِثْقَالُ ذَرَّةٍ فِي
السَّمَوَاتِ وَلَا فِي الْأَرْضِ وَلَا أَصْغَرُ مِنْ ذَلِكَ وَلَا
أَكْبَرُ إِلَّا فِي كِتَابٍ مُبِينٍ

[この節のきわめて巨大な宝庫のうちから、微粒子一匁ほど、すなわち微粒子の小箱の中にある宝石を示し、微粒子の運動とその役割について一端を語る。この目的は「序言」と「三つの点」から成る。]

序言

微粒子の変転とは、永遠なる描写者が、その全能の筆をもって宇宙の書に記す生成の諸徴が書き記される際に生じる震動と巡行である。

決して、唯物論者や自然主義者が妄想するような、偶然の玩具であり、無秩序で無意味な運動ではない。

なぜなら、すべての存在と同様に、微粒子もまた、そして一つひとつの微粒子も、その運動の始まりにおいて「ビスミッター」と唱えるからである。無限の力を要する重荷を、その能力を超えて担うからである。あたかも麦粒ほどの種子が、巨大な松の木ほどの重荷を肩に負うように。

また、その任務の終わりににおいて「アルハムドゥリッター」と唱える。なぜなら、あらゆる理性を驚嘆させる、叡智に満ちた造形的美と、有益なる装飾の麗しさを示し、威光ある創造主の賛美に、一篇の讃歌のごとき作品を呈するからである。たとえば、石榴や玉蜀黍に注目せよ。

まことに、微粒子の変転とは—

(注)

これは第二の目的における、微粒子の変転の定義に関する長文への注である。

クルアーンには「明確なる導師」と「明確なる書」が繰り返し言及されている。注解者の中には「両者は同一である」とする者もいれば、「別個である」とする者もいる。その本質についての説明も多様である。要するに、「神の知の称号である」とされてきた。

しかし、クルアーンの光照により、私の心に次の理解が生じた。「明確なる導師」とは、神の知と命令の一種に付された称号であり、顕現界よりもむしろ不可視界に向かうものである。すなわち現在よりも、過去と未来に目を向ける。それは、万物の外的存在よりも、その根源、系譜、根、種子に注目するものである。これは神の定命の一帳簿である。この帳簿の存在は『第二十六の言葉』および『第十の言葉』の注において証明されている。

まことにこの「明確なる導師」とは、神の知と命令の一樣態に付された称号である。すなわち、万物の起源、根、原型が、完全なる秩序をもって存在を生み出すという点において、それらが神の知の規範の帳簿によって整えられていることを示している。また、万物

の結果、系譜、種子が、未来に現れる存在の設計図と索引を内包していることから、それらが神の命令の小さな集成であることを示している。

たとえば一粒の種子は、一本の樹木全体の構造を整える設計図と索引を含み、それを定める生成の命令の小さな具現体であると言える。要するに「明確なる導師」とは、過去と未来、不可視界の周囲に枝葉を広げる創造の樹の設計図であり索引である。この意味における「明確なる導師」は、神の定命の帳簿であり、規範の集成である。その書き取りと裁定によって、微粒子は存在界における奉仕と運動へと導かれる。

一方、「明確なる書」は、不可視界よりも顕現界に向かう。すなわち過去や未来よりも現在に目を向け、知と命令よりも、神の全能と意志の称号であり、その帳簿であり、その書である。

「明確なる導師」が定命の帳簿であるならば、「明確なる書」は全能の帳簿である。すなわち、万物はその存在、本質、属性と様態において、完全なる造形と秩序を示しており、完全なる力の規範と、貫徹する意志の法則によって存在を与えられている。形は定められ

、識別され、一定の量と特定の形を付与される。ゆえに、その全能と意志には、普遍的・包括的な法則の集成、巨大な帳簿が存在し、各々の存在と固有の形は、それに従って裁断され、縫われ、着せられるのである。

この帳簿の存在もまた、「明確なる導師」と同様に、定命と自由意志の問題において証明されている。

怠慢と迷妄、そして哲学の愚かさを見よ。創造主の力のあの保存された書板と、主の叡智と意志のあの洞察に満ちた書の、万物における顕現と写像を感じ取りながら、神よ、それを「自然」と名づけ、盲目化したのである。

このように、「明確なる導師」の書き取り、すなわち定命の裁定と原理によって、神の全能は、存在の連鎖という、一つひとつが徴である諸存在を、「消滅と確定の書板」と呼ばれる時間の象徴的頁に記し、創造し、微粒子を動かす。したがって微粒子の運動とは、その記述、その写し取りに伴うものであり、存在が不可視界から顕現界へ、知から力へ移行する際の震動と運動なのである。

一方、「消滅と確定の書板」とは、不変で永続する至高の保存された書板が、可能界、

すなわち生と死、存在と消滅に常にさらされる事物の中において、変転する帳簿として現れたものであり、書いては消す板である。これこそが時間の真実である。

まことに、すべてのものに一つの真実があるように、我々が時間と呼ぶものもまた、宇宙を流れる巨大な流れの真実であり、「消滅と確定の書板」における全能の書記の頁と墨に等しいのである。

لَا يَعْلَمُ الْغَيْبَ إِلَّا اللَّهُ

このように微粒子の変転とは、不可視界に属し、万物の過去の根源と未来の系譜における秩序の基盤であり、神の知と命令の称号である「明確なる導師」の規範と書き取りのもとで行われ、また、現在と顕現界に属し、事物の形成と創造における作用の基盤であり、神の全能と意志の称号である「明確なる書」からの写し取りとして、流動する時間の真実であり象徴的頁である「消滅と確定の書板」に、全能の言葉を書き記すことから生じる、意味深い震動と運動なのである。

第一の点

ここには二つの考察がある。

第一の考察

あらゆる微粒子には、その運動においても静止においても、あたかも二つの太陽のごとき二つの一性の光が輝いている。なぜなら、『第十の言葉』第一の指示において概略的に、『第二十二の言葉』において詳細に証明されているように、もし一つひとつの微粒子が神的な命令を受けた存在でなく、その許可と統御のもとに動き、知と力によって変転するのでなければ、各々の微粒子は無限の知、限りなき力、万物を見通す眼、万物に向かう顔、万物に通じる言葉を自ら備えていなければならないからである。

なぜなら、元素のいずれの微粒子も、あらゆる生ある身体の中で、秩序正しく働く、あるいは働きうるからである。諸存在の秩序や形成の法則は互いに異なっている。それらの秩序を知らなければ、作業は不可能であり、仮に行われても誤りなく為されることはない。しかし現実には、誤りなく行われている。ゆえに、奉仕する微粒子たちは、全体を包摂する知をもつ存在の命令と許可、そしてその

知と意志によって働いているか、さもなくば、それ自体に全包的な知と力が備わっていないかならなければならないことになる。

たとえば空気の一つひとつの微粒子は、あらゆる生物の身体に入り、あらゆる花の果実に入り、あらゆる葉の構造に入り込んで働きうる。しかしそれらの構造はそれぞれ異なり、秩序もまた別々である。仮に言えば、無花果の果実の工場が毛織機のようなものであるなら、石榴の果実の工場は砂糖製造機のようなものであろう。このように、それらの建造物、それらの身体的设计図は互いに異なっている。

それにもかかわらず、空気のこの一つの微粒子は、それらすべてに入り、あるいは入りうるだけでなく、きわめて賢明に、熟練した職人のように、誤りなく働き、適切な形態をとる。その任務を終えれば、立ち去っていく。

このように動く空気の動く微粒子は、植物や動物、さらにはその果実や花に与えられる形態や量や構造を知っていなければならないか、さもなくば、それらが知る者の命令と意志によって任命されている存在でなければならない。同様に、静止した土壌の静止した一

つひとつの微粒子も、すべての花ある植物や実を結ぶ樹木の種子の基盤・起点となりうる以上、いかなる種子が来ても、その微粒子において、すなわち類同性において一つの微粒子に等しい一握りの土の中に、それぞれ固有の工場と、必要なすべての設備と構造が備わっていないなければならない。

したがって、その微粒子、そしてその微粒子の小屋に等しい一握りの土の中に、樹木や植物、花や果実の種類の数だけ、秩序ある霊的機械と工場が存在するか、あるいは万物を無から創造し、万物のあらゆる側面を知る驚異的な知と力が存在するか、もしくは絶対的全能者・万物を知る者の命令と許可、その力と力能によって、それらの任務が果たされているかのいずれかでなければならない。

たとえば、未熟で無知で平凡、しかも盲目の一人の人間がヨーロッパに行き、あらゆる工場や機械に入り、あらゆる技術や建築において、完全な秩序と熟練をもって働き、きわめて叡智的で精巧な作品を生み出し、人々を驚嘆させたとしよう。わずかでも理性のある者なら、その人物が自分自身の力で働いているのではなく、全体を統べる師が彼に教え、働かせているのだと理解するであろう。

また、盲目で無力で立ち上がることもできず、粗末な小屋に座っている一人の人間がいるとしよう。その小屋に、わずか一ディルハムほどの石や骨や綿のような材料が与えられる。ところがその小屋から、山のような砂糖、反物の山、数えきれぬ宝石、精巧で装飾された衣服、滋味豊かな食物が出てくるなら、わずかでも理性のある者は言わないであろうか。「この男は、奇跡を行う偉大な存在の工場における、せいぜい小さな部品か、貧しい門番にすぎない」と。

まさにそれと同様に、空気の微粒子が、各々が神的一性の書簡であり、主の芸術の古美術であり、力の奇跡、叡智の驚異である植物や樹木、花や果実において、その運動と奉仕を果たすこと、また土の微粒子が、それぞれ独立した機械・作業台・印刷所・宝庫・古美術であり、創造主の御名を宣言し、その完成を詠う独立した讃歌に等しい種子や核の穂や樹木の起点・基盤となることは、

「在れ、すると在る」という命令を有し、万物がその命令に服する威光ある創造主の命令と許可、意志と力によるものであることは、二足す二が四であるのと同じほど確実である。われらはこれを信ずる。

第二の考察

微粒子の運動における役割と叡智についての、簡単な指示である。

理性を視覚に墮とした唯物論者たちは、その無叡智なる叡智、すなわち不条理を基礎とする哲学の視点から、偶然に結びつけられた微粒子の変転を、自らのすべての原理の根本に据え、神的被造物の源泉であるかのように示してきた。無限の叡智によって装われた被造物を、無叡智で無意味で混沌としたものに帰することが、いかに理性に反するかは、わずかでも意識をもつ者なら理解するであろう。

これに対して、クルアーンの叡智の視点においては、微粒子の変転には、数多くの目的、叡智、役割が存在する。

وَإِنْ مِنْ شَيْءٍ إِلَّا يُسَبِّحُ بِحَمْدِهِ

のような多くの節によって、その叡智と役割が示唆されている。例として、そのいくつかを挙げることにしよう。

第一

必然存在なる至高者の、創造における顕現を更新し、新たにするために、各々の魂を一

つの模型のごとく取り、毎年その全能の奇跡によって新たな身体をそれぞれにまとうせ、また一つの書から、叡智によって千差万別の書を写し取り、一つの真理をさまざまな形で示し、さらに宇宙や世界や存在者たちが、群をなして次々と到来するための場と基盤を整えるために、威光ある創造主は、その力によって微粒子を動かし、任務を与えたのである。

第二

威光ある万有の主は、この世界、とりわけ地表の大地を、一つの所有地のように創造した。すなわち、生成と成長に適し、次々と新たな収穫を生み出しうるよう整えたのである。これは、その無限の全能の奇跡を、そこに播き、育てるためである。

この地表という畑において、微粒子を叡智をもって動かし、秩序の枠内で任務を与えることにより、各世紀ごと、各季節ごと、各月ごと、いや、日ごと、時ごとにさえ、その全能の奇跡による新たな一宇宙を示し、地上の中庭に、次々と異なる収穫を実らせる。無限の慈悲の宝庫からの贈与を、無限の力の奇跡の見本を、微粒子の運動によって顕現させるのである。

第三

神の御名の無限なる顕現の刺繍を示し、それらの御名の光彩を表現するために、限られた一つの地において無限の文様を描き、小さな一頁に無限の意味を表す無数の徴を書き記すため、永遠なる描写者は、完全なる叡智をもって微粒子を動かし、完全なる秩序のもとで任務を与えたのである。

実に、昨年の収穫と今年の収穫は、その本質においては同一である。しかし、その意味は互いに異なる。相対的な定まりを変えることによって、意味は変化し、増大する。相対的な個別性や一時的な個性は、入れ替えられ、外見上は消滅するが、それらの美しい意味は保持され、確固として存続する。

この木の、昨春の葉・花・実には魂がないゆえ、今春のそれらは、真実においては同一のものである。ただ相対的な個性に差異があるのみである。しかし、その相対的な個性こそが、常に新たに顕現する神の御名の様態の意味を表すため、今春のものが別の個性をもって、それらに代わって現れたのである。

第四

無限なる想像界のように、きわめて広大な天使的世界、そして限界なき他の来世的諸世界に対し、そこにふさわしい収穫や装飾や備品のようなものを育成するため、この狭き世界の畑、地表という作業台と田畑において、叡智ある至高者は微粒子を動かし、宇宙を流動的にし、存在者を巡行させている。

こうして、この小さな地において、あの巨大な諸世界のために、数多くの霊的収穫を育てている。無限なる力の宝庫から、尽きることなき奔流をこの世界から流れ出させ、その一部を不可視界へ、また一部を来世の諸世界へと注ぎ込んでいるのである。

第五

無限なる神的完成、限りなき美の顕現、果てしない威厳の顕現、そして無数の主への讃美を、この狭く限られた地と、短く限られた時間の中に示すため、微粒子をその力によって、完全なる叡智をもって動かし、完全なる秩序のもとで任務を与えることにより、有限の時間と限られた地において、無限の讃美を行わせている。

無限なる美・威厳・完成の顕現を示し、数多の不可視の真理、数多の来世的果実、滅びゆくものの中に宿る永続する本質と形から、数多の想像的文様と、意味深い書板的な織物を創出している。

ゆえに、微粒子を動かす者とは、これらの偉大なる目的、これらの重厚なる叡智を示す存在である。さもなくば、各々の微粒子の中に、太陽のごとき知性が備わっていなければならないことになる。

この五つの例に加えて、なお五千にも及ぶ叡智によって動かされている微粒子の変転を、あの理性なき哲学者たちは、叡智なきものと見なした。

しかも実際には、それらの微粒子は、一つは内的に、もう一つは外的に、二つの吸引力的運動の中で、神的想起と讃美をもって、まるでメヴレヴィーの旋舞者のごとく回転し、唱念しているにもかかわらず、彼らはそれを、自分勝手に、酔狂な者のように、意味もなく回り戯れているだけだと妄想したのである。

ここから明らかとなるのは、彼らのいう「知」は知ではなく無知であり、彼らのいう「叡智」は叡智ならざるものである、という事実である。

（第三の点において、これに関する第六の長い叡智がさらに述べられる。）

第二の点

あらゆる微粒子には、必然存在の存在と唯一性を証し立てる、二つの真実なる証人がある。

すなわち微粒子は、その無力と不活性にもかかわらず、意識的に巨大な任務を果たし、甚大な重荷を担うことによって、必然存在の存在を決定的に証言する。またその運動において、普遍的秩序に適合して動き、入る先々でその場に固有の秩序を尊重し、あらゆる場所に自らの故郷であるかのように安住することによって、必然存在の唯一性と、現象界と不可視界の主である存在の単一性を証言する。

すなわち、微粒子が属する者が誰であるかが明らかであるなら、その微粒子が巡り行くすべての場所も、またその者のものである。

ゆえに微粒子は、—無力であり、負荷は無限に重く、任務は無限に多いがゆえに—、絶対的全能者の御名と命令によって立ち、動いていることを示している。また、宇宙の普遍

的秩序を知り尽くしているかのように調和して動き、いかなる場所にも妨げなく入り込むことは、唯一の絶対的全知者の力と叡智によって働いていることを示している。

たとえば一人の兵士は、小隊・中隊・大隊・連隊・師団といったあらゆる階層において、それぞれ異なる所属関係と、それに応じた任務を有している。これらの関係と任務を理解し、それに即して調和的に行動することは、軍事的秩序のもとでの訓練と指導を受け、すべての部隊を統率する唯一の最高司令官の命令と法に従うことによって可能となる。

同様に、あらゆる微粒子もまた、互いに入り組んだ複合体の中で、それぞれにふさわしい位置、個別に有益な関係、秩序ある任務、叡智に満ちた結果を有している以上、その微粒子を、すべての関係と任務を保持し、結果と叡智を損なうことなく配置することは、宇宙全体をその掌中に収める一者にのみ可能なことである。

例えば、タウフィーク〔『光』の第一の書記である〕の眼の瞳に位置する一つの微粒子が、眼の運動神経・感覚神経・動脈・静脈に対して適切な配置をとり、さらに顔、頭部、胴体、そして人間全体という総体に対して、

それぞれに固有の関係・役割・利益を、完全なる叡智をもって備えていることは、その身体のすべての器官を創造した存在のみが、その微粒子をそこに配置しうることを示している。

とりわけ、糧として来る微粒子、糧の隊列の中を旅するそれらの微粒子は、驚嘆すべき秩序と叡智をもって移動し、層から層へと整然と通過し、意識あるかのように一步一步を踏み外すことなく進み、生ある身体の中で四つの濾過を経て、糧を必要とする器官や細胞を救済するため、血中の赤血球に乗せられ、施与の法則に従って援助に赴く。

ここから自ずと明らかとなるのは、これらの微粒子を、数千の異なる段階と地点を通過させ、導き、送り届ける存在は、疑いなく、寛大なる糧の授与者、慈悲深き創造主であり、その力にとっては、微粒子も星々も、肩を並べて等しいということである。

また、あらゆる微粒子は、かくも精妙なる造形の中で働いているのであって、もしそれが自らその造形を成すというのであれば、すべての微粒子と相互に関係し、それぞれ一つ一つにも全体にも対して、同時に支配者であり被支配者であるという立場に立ち、その驚

嘆すべき工芸と、叡智を示す精緻な造形を自覚的に知り、創出せねばなくなる。しかしそれは、千重にも不可能である。

ゆえに、微粒子とは、叡智ある創造者の定めた運命の法則と、全能の筆より生じ、運動を命じられた一点にほかならない。

たとえば、アヤソフィアの円蓋に据えられた石材が、もし建築家の命令と技法に従っていなかったとすれば、それぞれの石が、ミマル・スィナンに匹敵する大工技術を有し、かつ他のすべての石に対して、支配されつつ支配する存在、すなわち「崩落せぬため、互いに頭を寄せ合おう」と命令する権限を備えていなければならないであろう。

同様に、アヤソフィアの円蓋よりも千倍も精巧で、驚異的で、叡智に満ちた被造物における微粒子が、宇宙の匠の命令に従っていないとするならば、それぞれの微粒子に、宇宙の創造者と同等の完全性の属性を与えねばなくなる。

ああ、なんということか。

必然存在を認めぬがゆえに、背信的唯物論者たちは、自らの教義に従って、微粒子の数ほどの虚偽なる神々を認めざるをえなくなっているのである。

この点において、否定者たる不信者は、いかに哲学者であり学者であろうとも、究極的には、きわめて巨大な無知の中にあり、完全なる愚昧に沈んでいる。

第三の点

この点は、第一の点の末尾で予告された、第六の偉大なる叡智への示唆である。すなわち、次のごとくである。

第二十八の言葉・第二の問いへの答えに付された注において、次のように述べられていた。

微粒子の変転、ならびに生命体の身体における微粒子の運動には、数千の叡智があるが、その一つは、微粒子を光に浴させ、来世の世界を構築するにふさわしい存在とするため、生き生きとし、意味を帯びたものとする事である。

あたかも動物や人間、さらには植物の身体は、教育を受けに来る者たちのための宿舎、兵営、学校のようなものであり、無機的な微粒子がそこに入り、光を得る。まるで訓練と指導を受けるかのように、繊細さを獲得するのである。

そうして任務を果たすことによって、永遠の世界、すなわち全構成要素が生命を有する来世の住処を形づくる微粒子となる資格を得るのである。

問い

微粒子の運動に、このような叡智が存することは、何によって知られるのか。

答え

第一に、それは、すべての被造物に見られる秩序と叡智によって確証される、創造者の叡智によって知られる。なぜなら、最も微細なものにすら普遍的な叡智を付与する叡智が、宇宙の流れの中で最大の活動を示し、叡智的な造形の基礎となる微粒子の運動を、無意味なままに放置することはないからである。

また、最小の被造物であっても、その任務において無償・無報酬・無完成のままにしない統治と叡智が、最も数多く、最も根本的な役割を担う奉仕者たちを、光なきまま、報いなきままにしておくことはない。

第二に、叡智ある創造者が、元素を動かし、任務を与えることによって（それを完成への報酬として）鉱物の段階へと昇らせ、鉱物に特有の讃美を授け、さらに鉱物を動かし任

務づけることで、植物の生命的段階を与え、植物を糧によって動かし任務づけることで、動物の繊細なる段階を受け、動物における微粒子を任務づけ、糧を通じて人間的生命の段階へと昇らせ、さらに人間の身体における微粒子を選別し、精製し、洗練することで、ついには脳や心臓の最も微妙で繊細な部位にまで位置を与える。

このことから、微粒子の運動は無意味ではなく、それぞれにふさわしい一種の完成へと駆り立てられていることが知られる。

第三に、生命体の身体における微粒子の中には、種子や核のように、ある種の微粒子が、霊的な光、繊細さ、特質を得て、他の微粒子や、あの巨大な樹木全体に対して、魂や王のような地位を占めるものがある。

一本の大樹を構成するすべての微粒子の中で、一部の微粒子がこの段階にまで達するのは、その樹が生命の層において多くの周期を経て、微妙な任務を果たしてきたことによるのであり、これは、叡智ある創造者の命令のもと、自然本性的任務の中で、微粒子がその運動の種類に応じて、顕現する神名の栄誉にあずかり、霊的な繊細さ、霊的な光、地位、霊的教育を受けていることを示している。

要するに、叡智ある創造者は、あらゆるものに対して、それにふさわしい完成の一点と、存在の恩寵における段階を定め、その完成点に向かって努力する能力を与え、それへと導いている。

この主宰の法則は、すべての植物と動物において働いているのみならず、無機物においても働いており、平凡な土を、金剛石の段階、さらには高貴なる宝石の位へと向上させている。この事実において、偉大なる「主宰の法則」の端緒が見えている。

また、寛大なる創造者は、繁殖という偉大なる法則において用いられる動物たちに、報酬として、給金のごとき微細な快樂を与え、蜂やナイチンゲールのように、他の神的奉仕に従事する動物たちにも、完成への報酬を与え、意欲と歓喜の源となる地位を授けている。ここにもまた、偉大なる「寛恵の法則」の端緒が現れている。

さらに、あらゆるものの真実は、至高者の御名の顕現に向かい、それに結びつき、それを映す鏡である。

そのものがいかに美しい状態をとるかは、その御名の栄誉に属し、その御名がそれを望むのである。そのものがそれを知っていよう

と知っていまいと、その美しい状態は、真実の次元において求められている。ここから、偉大なる「美化と美の法則」の端緒が見えている。

また、寛大なる創造者は、寛恵の原則に基づき、あるものに与えた地位と完成を、そのものの期間や寿命が尽きたからといって取り戻すことはない。むしろ、その完成の果実、結果、霊的同一性と意味を保存し、魂を有するものについては、その魂を存続させる。

たとえば、この世において人間に顕現させた完成の意味と果実は、保存される。さらには、感謝する信仰者が食した、消滅する果実に対する感謝と賛美を、具象化された天園の果実として、再びその者に与えるのである。

この真理の中に、偉大なる「慈悲の法則」の端緒が明らかに現れている。

しかも、比類なき創造者は浪費をなさらず、無意味な行為をなさらない。たとえば秋の季節において役目を終え、死を迎えた被造物の物質的残骸を、春の被造物の中に用い、その建築の一部として組み込まれる。ゆえに、

يَوْمَ تَبْدُلُ الْأَرْضُ غَيْرَ الْأَرْضِ

の奥義により、

وَأَنَّ الدَّارَ الْآخِرَةَ لَهِيَ الْحَيَوَانُ

の示唆に照らせば、この世において無機で無自覚ながら重大な任務を担っている地上の微粒子は、石も木もすべてが生命と意識を有する来世の、いくつかの建築の中に組み込まれ、用いられることこそ、叡智の必然である。なぜなら、崩壊するこの世界の微粒子をこの世に放置するか、無へ投げ捨てることは浪費だからである。この真理の中に、きわめて壮大なる「叡智の法則」の端緒が見えている。

また、この世界の多くの痕跡、精神的実在、果実、さらにはジンや人間のような責任主体の行為の織物、行為の書頁、魂、身体が来世の市場へ送られるのであるならば、それらの成果と意味に奉仕し、伴走してきた地上の微粒子もまた、任務の観点から自らに応じた完成を遂げ、すなわち生命の光に幾度も奉仕し、生命的讃美の媒介となった後、この崩壊すべき世界の残骸の中から取り出され、かの世界の建築に組み込まれることは、正義と叡智の要請である。この真理の中に、きわめて壮大なる「正義の法則」の端緒が見えている。

さらに、魂が身体を統御するように、無機の物質においても、運命が書き記した創造命令はそれらを支配している。それらの物質は、運命の霊的な書記に従って、位置と秩序を得る。たとえば卵の種類、精液の区分、核の種類、種子の種別において、運命がそれぞれ異なる創造命令を書き記したがゆえに、それぞれ異なる位階と光を有するに至る。物質としての本質¹は同一であるにもかかわらず、無数に異なる存在の源となり、それぞれ異なる位階と光を帯びるのである。ゆえに、生命的奉仕と生命における主の讚美において、幾度も一つの微粒子として存在し、奉仕したのであれば、その微粒子の霊的な額に、それらの意味の叡智を、何一つ失うことのない運命の筆によって記録することは、遍在する知の必然である。この点において、きわめて壮大なる「遍知の法則」の端緒が見えている。

¹ [脚注1] まことに、それらはすべて四つの元素から構成されている。すなわち、水素、酸素、窒素、炭素のような物質から成り立っているのである。したがって、物質という点では同一のものと見なしうる。それらの相違は、ただ定命による霊的な記述のうちにあるのである。

それゆえ、微粒子は放置されているのではない²。

結語

以上の七つの法則、すなわち主宰の法則、寛恵の法則、美の法則、慈悲の法則、叡智の法則、正義の法則、遍知の法則といった多くの壮大な法則の顕在する端緒は、その背後に一つの至高の御名と、その御名の最大の顕現を示している。その顕現から理解されるのは、他の被造物と同様、この世における微粒子の変転もまた、きわめて高次の叡智のために、運命が定めた境界の上を、全能が授けた創造命令に従い、精緻な知の秤によって巡行しているという事実である。あたかも、より高次の世界へ赴く準備をしているかのようである³。

² 〔脚注2〕 この答えは、七つの「既にそうである以上」という語に対応するものである。

³ 〔脚注3〕 なぜなら、目の当たりに見るとおり、この濃密で低位なる世界において、極めて惜しみなく働く活動によって、生命の光を豊かに撒き広げ、輝かせているからである。それどころか、最も卑小な物質や腐敗した物体の中にさえ、新鮮な生命の光を豊かに灯し、それら濃密で卑小な物

ゆえに、生命ある身体は、その旅する微粒子にとって、あたかも学校であり、兵営であり、修養の宿舎であるとみなされる。そしてこのことは、確かな推断をもって断定される。

要するに、第一の言葉において述べられ、証明されたように、万物は「ビスミッター」と唱える。すなわち、すべての存在と同様に、各々の微粒子、その集団、その特定の共同

質を生命の光によって精妙なものとし、磨き上げている。このことは、ほとんど明言にも等しいほど明白に、次のことを指し示している。

すなわち、極めて精妙で、高尚で、清浄で、生命に満ちた別の世界のために、この濃密で無機的な世界を、微粒子の運動と生命の光によって磨き、溶かし、美しくしているのである。あたかも、精妙なる一つの世界へ赴くために、この世界を飾り整えているかのようである。それゆえ、人類の復活を理性に収めることのできない狭量なる思考の者たちも、クルアーンの光によって観察するならば、次のことを見るであろう。すなわち、すべての微粒子を一軍のごとく復活させ、召集するに足るほど万物を包摂する「万物を存立させる法則」が顕れており、それが目の当たりに万物を統御しているのである。

体は、状態の言語によって「ビスミッラー」と唱え、動くのである。

実に、先の三つの点の奥義により、すべての微粒子は、その運動の始点において、状態の言語をもって、

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

と唱える。すなわち、「我はアッラーの御名により、御計らいにより、御許可と御力によって動く」と言明するのである。

そしてその運動の結果において、あらゆる被造物と同様、各々の微粒子、その集団は、状態の言語をもって、

الْحَمْدُ لِلَّهِ رَبِّ الْعَالَمِينَ

と唱える。これは、賛歌の詩としての被造物の精巧な造形の中で、全能の小さな筆先として自らを示すからである。むしろそれらは、靈的で主的、壮大で無数の頭をもつ蓄音機の円盤のごとき被造物の上で回転し、主への讃美の賛歌をもって被造物を語らせ、神的讃美の旋律を奏でさせる、針先のような存在として自らを顕すのである。

دَعَوِيهِمْ فِيهَا سُبْحَانَكَ اللَّهُمَّ وَتَحِيَّتُهُمْ فِيهَا سَلَامٌ وَ
 آخِرُ دَعَوِيهِمْ أَنْ الْحَمْدُ لِلَّهِ رَبِّ الْعَالَمِينَ
 سُبْحَانَكَ لَا عِلْمَ لَنَا إِلَّا مَا عَلَّمْتَنَا إِنَّكَ أَنْتَ الْعَلِيمُ
 الْحَكِيمُ

رَبَّنَا لَا تُزِغْ قُلُوبَنَا بَعْدَ إِذْ هَدَيْتَنَا وَهَبْ لَنَا مِنْ لَدُنْكَ
 رَحْمَةً إِنَّكَ أَنْتَ الْوَهَّابُ

اللَّهُمَّ صَلِّ عَلَى سَيِّدِنَا مُحَمَّدٍ صَلَاةً تَكُونُ لَكَ رِضَاءً
 وَ لِحَقِّهِ آدَاءً وَ عَلَى آلِهِ وَ صَحْبِهِ وَ اخْوَانِهِ وَ سَلِّمْ
 وَ سَلِّمْ لَنَا وَ سَلِّمْ دِينَنَا آمِينَ يَا رَبَّ الْعَالَمِينَ